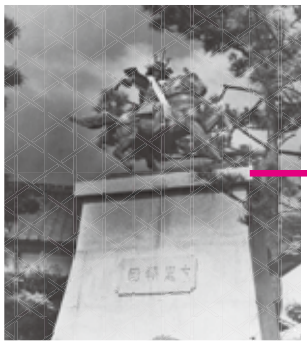
vol.250

松原小学校の楠木正成像

西田 孝司（松原市文化財保護審議会）



▲供出された楠木正成像と台石の写真（伊東敬光氏蔵）

▲楠木氏の「菊水紋」が入った支石（岡3丁目・伊東敬光氏宅）

▲二宮金次郎像の台石と背面に残る楠木正成像銘

▲松原小学校の二宮金次郎像（新堂2丁目）「菊水紋」の支石ははずされている。

台石が語る戦前の大楠公像から戦後の二宮金次郎像へ

松原小学校（新堂二丁目）の正門を入ると、右手に二宮金次郎像が台石の上に建っています。金次郎（のち尊徳）は江戸時代後半、子どものころから親に孝行し、苦学しながら社会に貢献した農政家です。各地の小学校には、金次郎像が戦前から戦後にかけて建立されていました（「歴史ウォーク204」）。

松原小学校の金次郎像は、小学校創立八十五周年記念として、昭和三十四年（一九五九）、現岡三丁目の伊東榮一によって寄贈されたものでした。当時、同校は河内松原駅前のゆめニティまつばらの地にありました。私が六年生の時のことで、私も同級生の藪中三十二君（元外務次官）や吉川榮治君（元自衛隊海上幕僚長）らと一緒に式典に参加していました。

ところで、金次郎像の台石正面には佐藤義詮元大阪府知事の書になる「志学」の文字がはめられていますが、背面に廻ると、中央に次のような説明文がプレートとして刻まれています。

頌

岡　伊東榮一氏

仝　隆氏

大楠公ノ誠忠ヲ景仰シ以テ日本精神ノ発揚ニ資する為　公ノ銅像ヲ寄贈セラル

昭和十四年十月吉日　松原村

つまり、金次郎像を戦後、寄贈した伊東榮一が、これに先立つ昭和十四年（一九三九）十月に、大楠公こと楠木正成像を当時の松原尋常高等小学校に寄贈し、松原村が建立したことがわかります。

金次郎像を支える台石裏面に正成像のプレートという組み合わせはどういう訳があるのでしょうか。実はもともと、台石の上には楠木正成の銅像が建立されていたのでした。金次郎像と正成像のナゾを解くため、昭和六十二年（一九八七）、九十一歳で亡くなった榮一の孫にあたる伊東敬光さんの岡の自宅を訪れました。榮一は明治三十年（一八九七）の生まれですが、地場産業であった河内木綿の技術を生かし、昭和初年、岡で縫製工場を興こし、販売にもあたっていました。

伊東さん宅の庭に、楠木氏の旗印である菊水紋が中央にはめ込まれた長細い石が置かれています。この平石は、今は取り外されていますが、台石上の正成像を支える石として組み合わされていたものです。

正成像が寄贈されたのは、プレート刻書によって、昭和十四年と分かるのですが、伊東さん宅には、今は無き正成像と台石を撮影した写真と裏書が保存されていました。東京・皇居前広場に現存しているポピュラーな馬上の正成像です。著名な彫刻家である高村光雲らの作を模しています。

写真を見ると、台石正面には「七生報国」と刻まれています。南北朝時代、南朝の後醍醐天皇に忠誠を尽くした正成が、「七たび生まれ変わっても国のために尽くす」と言ったと伝える格言が書かれているのです。昭和三十四年、金次郎像が建てられた時、正成像の台石がそのまま使われましたが、「七生報国」の言葉だけを金次郎像にあわせて「志学」に取り変えたのです。

また、写真の裏書には、次のように書いています。

昭和十五年七月十一日　児童生徒ニ忠誠ノ心ヲ涵養セムガ為　松原校々庭ニ大楠公馬上ノ銅像ヲ寄附建立

昭和十八年六月二十一日　大東亜戦ニヨリ銅像出陣ノ為脱魂式ヲ擧行ス

昭和十八年十二月十八日　銅像愈々出陣

台石背面銘には昭和十四年の寄贈を記し、裏書が十五年と完成年を書いていると思われますが、戦時中の軍国主義を反映する文言が色濃く出ています。昭和十八年（一九四三）、アジア太平洋戦争が激しくなるにつれ、金属類が供出ー「出陣」「脱魂式」という言葉で表現ー され、溶かされ軍事品にかわっていったのでした。

「大楠公馬上ノ銅像」は建立から、わずか数年でその姿を消しましたが、戦争を再び起こさない、平和をめざすわが国にとってのある意味、歴史遺産として記憶の中にとどめています。